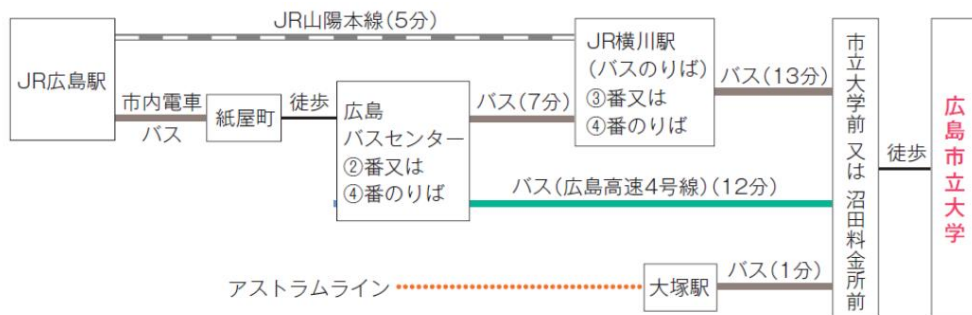


# 平成30年度 JACET 中国・四国支部 春季研究大会プログラム

## 交通機関と会場のご案内

### ●広島市立大学へのアクセス



※「市立大学前」バス停から大学までは徒歩すぐ、「沼田料金所前」バス停から大学までは徒歩8分かかります。

大学へのアクセスの詳細は

<https://www.hiroshima-cu.ac.jp/content0002/>

でご確認ください。(バスの時刻表がリンクされています。)



### ●キャンパスマップ 会場は ③ の「図書館・語学センター棟 4 F」



・車でお越しの方は、上の地図の駐車場をご利用ください。

駐車場の位置

4号線 (トンネル) 側から → 大学正面の正門前を直進 → 歩道橋を通過  
写真の左側の道路で右折して、上に50メートル → 駐車場入り口

連絡先 岩井千秋 (広島市立大学) iwai@hiroshima-cu.ac.jp 電話 082-830-1637

## 平成 30 年度 JACET 中国・四国支部

### 春季研究大会プログラム&発表要旨

日時：6月2日（土）12:30 から受付

場所：広島市立大学 図書館・語学センター棟 403A教室

〒731-3166 広島県広島市安佐南区大塚東3丁目4-1

12:30 ～ 受 付

13:00 ～ 13:20 支部総会（図書館・語学センター棟 403A 教室）

司会 岩中 貴裕（山口学芸大学）

13:20 ～ 13:25 開会式

開会の辞

支部長 岩井 千秋（広島市立大学）

#### 第1室（403A 教室）

発表1：児童・生徒の英語でのパフォーマンス評価のためのルートマップ的ルーブリックの開発

(13:30-14:00)

中山 晃（愛媛大学）

発表2：大学英語教員の教師アイデンティティに関する質的研究

(14:05-14:35)

森谷 浩士（広島経済大学）

発表3：「教室内英語評価尺度」を活用した英語教師教育－模擬授業における教師英語の省察

(14:40-15:10)

池野 修（愛媛大学）

中田 賀之（同志社大学）

木村 裕三（富山大学）

長沼 君主（東海大学）

発表4：英語学習における動機づけと学習量に与える「井の中の蛙効果」の検討

－所属クラスの習熟度と所属クラス内での位置づけのどちらの影響が大きいのか－

(15:15-15:45)

関谷 弘毅（広島女学院大学）

第2室 (403B 教室)

発表1 : ロアルド・ダールの 'Gallopig Foxley' における言語表現とユーモアについて

(13:30-14:00)

田淵 博文 (就実大学)

発表2 : 高専1年生に対する体育 CLIL の可能性 (2)

—英語を使用したバレーボールの授業を事例として—

(14:05-14:35)

二五 義博 (海上保安大学校)

伊藤 耕作 (宇部工業高等専門学校)

発表3 : 誤答分析に基づく音素配列確率の高い対照単語リストによる

発話単語認知能力の向上について

(14:40-15:10)

小山 尚史 (岡山大学)

発表4 : The Changing Landscape for Elementary School English Education in Japan:

Preparing Future Teachers for Future Challenges

(15:15-15:45)

PARKIN, Douglas (Yamaguchi Gakugei University)

(休憩 : 15:45-16:00)

講演 (403A 教室) (16:00~17:30)

司会・講師紹介 : 岩井 千秋 (支部長)

「入試改革の動向と高校教育改革の現状～英語教育を中心として～」

講師 : 延原 範昭 (株式会社進研アド中国・四国支社長)

17:30 - 17:40

閉会式

閉会の辞

副支部長 高橋 俊章 (山口大学)

懇親会

寅之助 <https://www.hotpepper.jp/strJ000028448/>

電話 082-240-1501

住所 広島市中区胡町 6-9 B1F (広島電鉄八丁堀電停より徒歩2分)

移動バス 大学正門発 (18:09) →バスセンター着 (18:23) 懇親会開始 18:40

## 研究発表要旨

### 第1室

発表1：児童・生徒の英語でのパフォーマンス評価のためのルートマップ的ルーブリックの開発

発表者：中山 晃（愛媛大学）

平成32年度からの次期学習指導要領に含まれる小学校での英語の教科化に向けて、その教育的効果に焦点をあて、パフォーマンスレベルでの児童・生徒の活動の様子を評価するための指標を開発した。基本的には、インクルーシブ教育システムへの汎用性を考慮し、特別支援学級での外国語活動と英語で実際に使用できるよう、障害の程度と特性に対応したルーブリックの作成を試みた。特に、アウトプット・パフォーマンスの評価という事で、授業中の活動の様子を積極的に評価できるように、柔軟性のある評価項目及び基準を設け、またパフォーマンスレベルで児童・生徒がどのような表現を使えるようになったのか確認できるように例となる表現をルーブリックに入れ込むようにした。研究授業で試用した教員の感想から、特別支援学級の児童・生徒など、個別性の高い評価項目については、個別の支援計画を参照しながら、心理検査の結果を踏まえた項目を含めたことで、実態に合った評価が行えるとのコメントが得られた一方で、その運用面において、客観的な評価が複数の評価者間で統一できるのかといった課題が浮き彫りとなった。今後の課題として、教育的な効果について児童の行動変容に関する丁寧な記述と、継続的にスキルの変容を確認する方法の他、どのようにルーブリックに書き込むのか等、活動中心の小学校英語における評価（ユーザビリティ）の在り方に検討の余地があることが分かった。

発表2：大学英語教員の教師アイデンティティーに関する質的研究

発表者：森谷 浩士（広島経済大学）

外国語教師の知識、信念・信条、思考を研究対象とした言語教師認知研究の分野では教師アイデンティティーが一つの研究分野として確立している（Barkhuizen, 2017）。教師アイデンティティーは教師の成長を考えるうえで欠くことのできない概念である（Freeman, 2009）と同時に、授業実践との相互的な関わりがあることから言語教育そのものを考えるうえでも重要な視点である（Martel & Wang, 2014）。にもかかわらず、日本国内における大学英語教員の教師アイデンティティーに関する研究は十分になされているとはいいがたい。本研究では教師の役割という視点から大学英語教員の教師アイデンティティーに迫り、その形成に寄与する要因を質的研究手法によって探った。データは34人の大学英語教員（日本人英語教師12人、外国人英語教師22人）との面接調査で得たインタビュー記録で、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析された。本発表では継続的比較分析法により生成した教師アイデンティティーを形成すると考えられる代表的な概念とその具体例を報告する。

発表3：「教室内英語評価尺度」を活用した英語教師教育—模擬授業における教師英語の省察

池野 修（愛媛大学）

中田 賀之（同志社大学）

木村 裕三（富山大学）

長沼 君主（東海大学）

本発表では、英語教師の英語を評価するツールとして開発した「教室内英語評価尺度」を模擬授業の評価において活用した事例を報告する。「教室内英語評価尺度」は、教師の英語使用を、(1) 文法、(2) 語彙、(3) 発音、(4) 指示や説明、(5) 生徒とのインタラクションの5つの観点から評価を行うためのツールであり、各観点4レベル（未適格、適格、優良、熟達）の記述からなる尺度である。本事例研究は、評価尺度を活用して模擬授業者の英語使用を分析的に評価することで、英語教師に必要とされる英語能力（e.g., 学習者から発話を引き出す力、学習者に合わせて言語使用を調整する力）についての省察を促すことを意図したものである。本研究は、(1)「英語教師に必要とされる英語力」についての自由記述アンケートの実施（プレ調査）、(2)「教室内英語評価シート」についての解説とその理解度の評価、(3)「教室内英語評価シート」を活用した模擬授業の評価（全9回）、(4)「教室内英語評価シート」についての評価、(5) (1)と同じアンケートの実施（ポスト調査）という手順を踏んで実施した。発表では、「教室内英語評価尺度」の理解度やその有用性についての数量的データ、受講生の英語観についての質的データなどに基づき、「教室内英語評価尺度」を活用した英語教師教育実践の成果と課題について考察する。

発表4：英語学習における動機づけと学習量に与える「井の中の蛙効果」の検討

—所属クラスの習熟度と所属クラス内での位置づけのどちらの影響が大きいのか—

関谷 弘毅（広島女学院大学）

本研究は、英語学習における動機づけと学習量に与える「井の中の蛙効果」を検討した。「井の中の蛙効果」(Marsh, 1987)とは、同じ成績の学習者であっても、よくできる学習者ばかりの集団の中では、優秀な学習者との比較のために否定的な学業的自己概念を形成し、あまりできない学習者ばかりの集団の中では、レベルの低い学習者との比較のために好ましい学業的自己概念を形成しやすい現象のことである。検討にあたり、私立女子大学における全学必修の英語科目の履修生を対象とした。学年末に動機づけと学習量を測定する質問紙調査を行い、所属クラスの習熟度と所属クラス内での位置づけが与える影響を検討した。分析の結果、動機づけに関しては所属クラスの習熟度が高いほうが好影響を与えること（所属クラスの主効果）が示された。学習量については、所属クラスの習熟度によって所属クラス内での位置づけの影響が異なること（所属クラスの習熟度と所属クラス内での位置づけの交互作用）が示唆された。具体的には、中習熟度クラスではクラス内での位置づけの低い学習者の方が学習量が多いが、高習熟度クラスではクラス内の位置づけの高い学習者の方が学習量が多いことなどが示された。条件によって「井の中の蛙効果」が見られることが示唆された。今後は、学習者の専門分野や、英語学習に対する重要性の認知度の違いによる検討を進めたい。

## 第2室

発表1：ロアルド・ダールの 'Gallopig Foxley' における言語表現とユーモアについて

田淵 博文 (就実大学)

ロアルド・ダール (1916-1990) は世界的に有名な児童文学作家であると同時に短編の名手でもある。本発表では、ダールの短編 'Gallopig Foxley' を用いて、具体的に短編の読み方について考えてみたい。ダールの短編は、最後にどんでん返し (surprise ending) が来るのが大きな特徴である。読者に緊張と弛緩をもたらし、最後に笑いを起こさせる仕掛けは何かということについて、語りの手法やダールの実体験や道具立てである新聞などの観点から分析を試みる。この短編の主人公である William Perkins の性格をあらわしている冒頭部の描写、50年前のパブリックスクール時代を主人公が回想する中間部の描写とダールがレプトン校時代に校長や上級生から受けた体罰との関連性、最後に緊張から弛緩となり笑いがどっと起きる最後の終結部の描写について、具体的に解説を加えながら、短編小説の読み方について考えてみたい。

発表2：高専1年生に対する体育 CLIL の可能性 (2)

—英語を使用したバレーボールの授業を事例として—

二五 義博 (海上保安大学校)

伊藤 耕作 (宇部工業高等専門学校)

現在日本では、外国語の効果的な習得方法の1つとして CLIL (内容言語統合型学習) が注目されつつある。CLIL では、「内容」と「言語」の同時習得に加え、「思考」の発達や「協学」による学習者中心の質の高い学びが目指され、アクティブラーニングにも通じるものがある。他教科内容との組み合わせとして、実技教科を対象とした実践例は少ないが、二五・伊藤 (2017) では、サッカーを事例とした CLIL の 4C の視点からの分析により、体育と英語の教科横断的な授業による利点や課題を明らかにした。本発表はその第二弾として、体育 (バレーボール) の内容を英語で学ぶことが、内容への動機づけ、コミュニケーション能力育成、思考や協同学習の視点でいかなる効果があるかを探る。研究方法としては、山口県内の国立工業高等専門学校1年生3クラス122名を対象として、まず、CLIL の4つの軸に基づく教材を作成し、授業案をデザインした。とりわけ思考面では、Coyle et al. (2010) が CLIL の重要な構成要素とする思考の6つの分類 (記憶→理解→応用→分析→評価→創造) の視点から、低次から高次思考力へと発展していくように活動を工夫した。3回の授業実践 (2回が実技で1回が座学) の後には学習者の反応を見るため、選択式 (4点法) と自由記述式を併用したアンケート調査を実施した。研究結果、4Cのうち思考面では、多くの思考タスクに取り組むことで、自チームの課題に即した練習や試合を行える可能性が示唆された。

発表3：誤答分析に基づく音素配列確率の高い対照単語リストによる

発話単語認知能力の向上について

小山 尚史（岡山大学）

ディクテーションの誤答分析を行い、誤答について、英語のチャンクの正答リスト、および同様の英語のチャンクと誤答分析に基づいて作成した音素列を対照させた単語のリストの2種類を作成して分析した研究（小山（2014））から、音素列対照の練習は、目標語の音素・音節以外に他の単語中の目標でない音素列の知覚も要求するため、目標の音素列に集中できない負担が考えられた。一方、正答チャンクの繰り返しは、チャンク内の目標語などが同じため、目標語内の音素（列）に注意が集中しやすいと考えられた。また先行研究から、音素配列確率について、高い確率の音声連続が、より速く正確に認識されること、および隣接語について、その数が多く高密度の範囲からの単語は、話される単語の処理が抑制される。これらのため、聞き間違えた音素列について、対照的に比較しながら聞く練習語の選択時に、音素配列確率の高い音素列を含む、低密度の単語による練習は、聞き間違えた音素列の音声知覚を拡大的に修正し、幅広い単語認知能力の向上が予想される。練習後に、目標の音素列を含む、練習語とは異なる新しい単語も加えて、当初のディクテーションとは別の文脈で目標語以外の単語の音声知覚を測定し、単語認知能力が向上するかについて分析した。

発表4：The Changing Landscape for Elementary School English Education in Japan:

Preparing Future Teachers for Future Challenges

PARKIN, Douglas（Yamaguchi Gakugei University）

The purpose of this presentation is to outline the new reforms given by MEXT and to see if the presenter's course Methods of English Language Education 英語科教育法（小） meets the requirements of the new course of study for elementary school education, which is to be fully implemented by 2020. The presentation will give a brief history of English education in Japan, summarize elements from the new course of study given by MEXT, then illustrate the methods used in the presenter's course. The presentation will analyze the methods and theories used in the Methods of English Language Education course given by the presenter and will discuss how it has met the needs given by MEXT, and in some cases how it has not. In addition, the presentation will highlight curriculum changes given by MEXT with regards to new textbooks, and the hours of instruction requiring incremental modifications from 2018-2020. The conclusions of this presentation will address the items which need to be changed in the presenter's course and will offer solutions to meet the new requirements given by MEXT, regarding the Methods of English Language Education 英語科教育法（小） course of study for university students, studying to become elementary school teachers.